スポーツにおける体罰の根源とは何かと問われて考え続けなければならないこと

学校長　渡辺　雅之

あの事件[注1]が報道された時に蘇った記憶は約半世紀前の自身のスポーツ原体験であった。東京オリンピック（1964）において日の丸を着けて試合する選手がなんと輝かしく見えたことか。勝利した者の笑顔の清々しさ，または涙する姿の美しさ，あるいは敗者の示す様々な美学に酔いしれた。

たとえば，女子バレーボールの大松監督の孤高とハードトレーニング，走る哲学者を思わせるアベベ選手の軽快さとマラソンの過酷さ，柔道無差別級でヘーシンク選手が勝利した瞬間に畳に上がろうとする自国役員を制する姿と敗者の神永選手が力を出し切った満足感あふれる姿，体操競技の美しさと力等枚挙にいとまがない。身体と精神をギリギリのところまで鍛え上げる「スポーツ」というものに魅せられた。

世は「スポ根漫画[注2]」全盛となる。その筆頭は「巨人の星」である。読売巨人軍を追われた名三塁手星一徹は息子飛雄馬を幼き頃より投手にすべく，鍛えに鍛え上げ，多くのライバルとの激しい競い合い，最後は父自身と勝負してまでの執念の物語が社会化した。

私は中学生となり，卓球部で本格的にスタートした。しかし，そこで待っていたのはハードなトレーニングであった。いきなり，体育館で座れと言われ，素直に座ると怒号が跳んだ。「空気イス」と呼ばれる壁にイスなしで座る形の筋トレであった。他に，悪名高きウサギ跳びや「ひよこ歩き」，「三種の神器」と称される腹筋，腕立，背筋，そして，ペナルティとしての「校庭 10 周」等，スポーツ障害に発展することもままあり，たまたま私自身は頑丈で体力があったため事なきを得ただけだったのだろう。でも，暴力を受けることはなかったのが事実である。最も肝心の卓球の成績は上がらなかった。

高校に進学した。卓球漬けの 3 年間を送った。朝練もやり，放課後や土日も，通常インターハイ予選が終わる（7 月頃）と引退する 3 年生時代を 1 月まで練習に，試合に出場した。高校でのトレーニングはむしろ私がリードして進めた。トレーニングの科学的原理などを学び，一斉トレーニングから個別トレーニングへ，負荷量は学年が増すと増える，体力レベル別とした。ゆえに，同級生は早々に離れていった。卓球はやはり芳しい成績は挙げられなかった。それゆえに，大学でこそ花を咲かそうという気になっただけでなく，将来は体育の教員として，卓球の指導者としても道を決めたのであった。

大学では自己管理の下，ウェイトトレーニングを軸にトレーニングを実施し，運動生理学の勉強と共に卓球について技術論や指導論を学んだ。また，縁あって当時の世界レベルの長谷川信彦，河野満，伊藤繁雄さんらとプレイ出来たことも更なる高みを見続ける原動力となった。

結果として，自らの体力水準が上手く適応し，故障しなかったこともあり，卓球を嫌いになることもなかったので今もこうしてスポーツの世界に生きていることが出来る理由なのだろう。暴力とは無縁の経験を過ごすことができた。そして，指導者としても暴力を用いることなく，今日に至っている。

閑話休題。体罰の実態報告をみる。文部科学省による平成 25 年 4 月 26 日付の第 1 次報告（平成 24 年 4 月から平成 25 年 1 月までに発生したもの，公立のみ）によれば，総発生件数 840 件，学校別では小学校 189 件，中学校 416 件，高等学校 220 件，中等教育学校 0 件，特別支援学校 15 件であった。そのうち懲戒処分等を行ったのは小学校 147 件（検討中 42 件），中学校 318 件（検討中 98 件）高等学校 127 件（検討中 93 件），特別支援学校 12 件（検討中 3 件）となっている。発生状況を中学校だけについてみると，被害生徒数 905 名（被害全児童生徒数の 47.9%），場面では部活動が 32.9%と最多，次いで授業中 26.7%，放課後 13.0%，その他 11.3%，他となっている。場所としては，運動場・体育館が 39.9%，教室 23.1%，その他 21.2%，他である。体罰の態様は，素手で殴るが 57.7%，蹴る 9.6%，殴る及び蹴る等が 11.1%，その他 13.0%，他である。体罰事案把握のきっかけでは，教員の申告 43.3%，保護者の訴え 32.7%，第三者の通報 22.4%，生徒の訴え 8.4%，その他 3.4%となっている。

東京都教育委員会による都内公立学校における体罰の実態把握調査は，平成 25 年 1 月 21 日から 3 月 15 日に行われ，平成 24 年度の教育活動における暴力による体罰，精神的・肉体的苦痛を感じる体罰の疑い例の有無について調査した。体罰の報告は小学校 31 名，中学校 110 名，高等学校 40 名，特別支援学校 1 名であった。中学校だけに着目して，体罰の行為者は教職員 92 名，卒業生・上級生等 14 名，外部指導員 4 名であった。場面別では，部活動 63 名，授業等の教育活動中 47 名であった。被害生徒総数は 323 名，うち教職員によるもの 282 名，卒業生・上級生等によるもの 33 名，外部指導員によるもの 8 名であった。110 名の体罰者に対し体罰への認識を問うと，感情的になってしまった例 39 名，言葉で繰り返し言

っても伝えられなかった例29名，体罰と思っていなかった例17名，人間関係ができているので許されると思った例12名，体罰を行う以外考えられなかった例6名，高い成績，成果の期待に応えようと思った例7名となっている。体罰への認識とは，体罰は指導の手段の一つであり，有効な方法として機能しているということが窺われる調査結果である

さて，日本におけるスポーツ界の体罰体質の土壌とは何であろうか。その根源を考えてみよう。体罰の起源は軍隊にあるとする論はよく首肯されている。片山は教師から受けた体罰を持って「まるで軍隊教育だ。」[注3]と思ったという。軍隊経験こそないが，その種の情報に事欠かない中でそう感じ，今でもからだは体罰を忘れない，という。戦場体験者の水木しげるが「カランコロン漂流記」[注4]で実態を描いている。軍隊はまさに殴る世界だ。合理的な理由は要らない。内田[注5]はそのことを「待ったなし主義」という。速成を持って兵を鍛え上げる手法である。これがスポーツにもそのまま流用された。選手は示された期限までひたすら指導者の指示に盲従する。体罰すら期限後の報酬に対する代価として受忍する。報酬とはスポーツの好成績であったり，上級学校への推薦入学，就職等である。「それは一生かかってたいせつに使い伸ばすべき身体資源を『先食い』すること」と内田[注5]が指摘することは誠に慧眼としか言いようがない。

「体罰の社会史」を著した江森[注6]によれば近代を除く日本社会には体罰がなかった，のだ。その一方で，戸塚ヨットスクールで訓練生が亡くなった事件（1980，1982）で実刑判決（6年）を受けるも，戸塚[注7]は体罰を教育と言って憚らない。体罰によって恐怖や怒り等の感情を惹起させて本能を鍛えるという考え方のようである。

そもそもスポーツのスポーツたる所以はノベルト・エリアスが「文明化の過程」と述べたように遊技や闘争の他に暴力の克服があった[注8]のである。だが，日本のスポーツ草創期にはナショナリズムが占有した。弓館小鰐がストックホルムでのオリンピックの後に（1913）「何ぞ運動に冷淡なる」と記しているのは，「運動が国家興隆のために忽諸に付すべからざるものを自覚し，（後略）」ということで，それを紹介した波多野[注9]もこれを「こんにちでも十分に通用するのではないか。」と結ぶように，今福[注10]が指摘する「戦後，スポーツはナショナリズムと連動しながらあいかわらず国家や国民の統合を実現するために利用されていった。」ままなのである。スポーツが近代化によって非暴力化してゆくのに反して，日本では逆にスポーツの名の下に暴力化していった。ある学校のチームが勝利という目先の利得のために体罰を合理化したのだ。日本の狂信的な軍国主義が天皇制を利用して戦争を拡大，長期化させた精神構造と同じ轍を踏んだ，と言える。

元職業野球選手の桑田真澄のような超一流投手が体罰を100%否定[注11]してくれたことに光明を見出すものである。柔道女子日本代表選手の挙げた声に共鳴する全てのスポーツ愛好者と共にスポーツを楽しむためになぜ暴力が伴ってきたのか，体罰をどうやって根絶できるのか，考え続けねば。巻頭に誓う。

注1　あの事件とは，2013年1月8日大阪市教育委員会が公表した大阪市立桜宮高等学校生徒が自殺した件（事件は2012年12月23日発生）のこと。男子生徒はバスケットボール部に所属。日常的に体罰を受けていたことから，体罰によって自殺した可能性が高いと報じられた。その後の調査によって両者の因果関係は極めて高いものとされた。

注2　スポ根漫画とは，スポーツ根性漫画の略。スポーツを背景に徹底的に鍛え上げるだけでなく，しごきやスパルタトレーニングをものともせずにひたすら耐え，頑張る姿を象徴とする。とにかく頑張る，弱音を吐かずに最後まで勝利を求め，完遂することを「根性」に表徴，美化する。

注3　朝日新聞（2013年2月19日）朝刊　片山杜秀　体罰　近代日本の異物

注4　宮台真司他著　戦争論妄想論（1999）所収　教育資料出版会

注5　朝日新聞（2013年2月26日）朝刊　内田　樹　スポーツ界の体罰

注6　江森一郎（2013）新装版体罰の社会史　新曜社

注7　東海テレビ取材班（2011）戸塚ヨットスクールは，いま　現代若者漂流　岩波書店

注8　多木浩二（1995）スポーツを考える―身体・資本・ナショナリズム　ちくま新書

注9　波多野勝（2004）東京オリンピックへの遙かな道　草思社

注10　今福龍太（1997）スポーツの汀　紀伊國屋書店

注11　三輪定宣・川口智久編著（2013）　先生，殴らないで！　学校・スポーツの体罰・暴力を考える　かもがわ出版